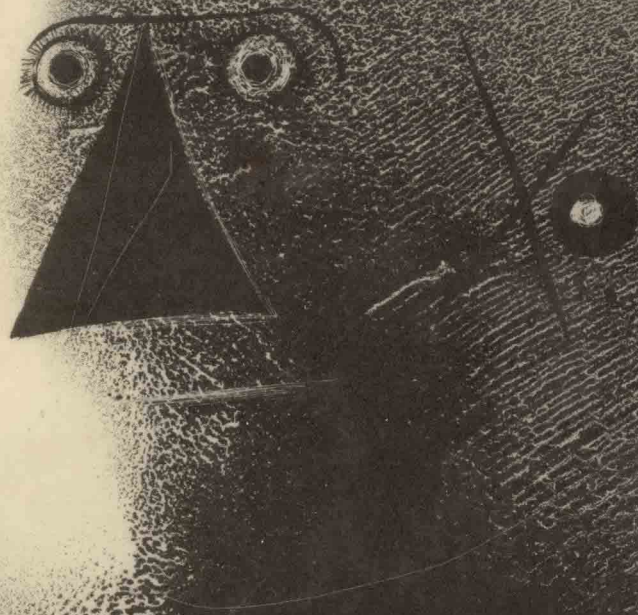


曳船の男
下
井上光晴



井上光晴

講談社

ひきふね おとし
曳船の男 下

一九八〇年五月三〇日 第一刷発行

著者——井上光晴
いのうえみつはる

© Inoue Mitsuharu 1980, Printed in Japan



発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三—九四—二二(大代表) 振替東京八一五〇

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——株式会社大光堂

定価——八九〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

0093-168575-2253 (0)

(文1)

目

次

影のない男		火と灰	7
	119		
芝居	76	基地	41
		フラストレーション	60

働かないのはなぜ

津山病院

149

雲の降る日

163

てまりうた

186

裝幀・司修

曳船の男
下

火と灰

警官に先導された葬列は、小涌火葬場を対岸に望む海辺で、三たび休止した。二個の棺を積むリヤカーを引く者の交替と、浮岳老人ホームより繰り出した人々の足に憩いを与えるためである。

老人ホーム専用のマイクロスパスを使用しないのは、世間に対する気兼ねをも含まれていた。五年余に及ぶ長い葛藤のあげく、無理心中の形で三角関係を精算するという事件の始末を、どんなふうにつけてよいのか。とにかく内々の葬式だけはすまそうという段取りになったのだ。

「今度はわたしが代りますけん」

苗沼陽吉が申しでると、即座にあちこちから声が飛んできた。

「そりゃいかんばい。何ちゆうても、これは浮岳からでた棺だけんな」

「よその人にお棺を引かせたりしちゃならんとよ。火葬場にきて貰うのも、どうかと思うとるのに」

「無関係の人に、そこまで踏み込まれると、かえってこっちが迷惑するもんね。いくら外からみた話のおもしろいからというて、内にまで顔を突込まれちゃたらんけんな」

「そういうつもりじゃ……」彼はいいかけた言葉を、仕舞いまで通さなかった。確かに浮岳老人ホーム以外の参列者は、警官を除いて彼と死者の遠縁だという蒨蒨屋の親父だけであつたし、胡乱な

目を向けられても仕方がない。

老女の首に細紐を巻きつけて殺害した後、自らも剃刀で咽喉を掻切つて果てた七十五歳の男を知人と呼ぶには多少の無理があった。降旗信雄と名乗るその老人が、鍼灸のために、彼の自宅を訪れたのは都合三度。これというやりとりをかわしたわけでもないのに、火葬場に参加する資格として充分とはいえないのだ。それでも強引に棺の列に割込んだのは、事件にかかわる人間の運命に生々しい衝撃を受けたからである。

事件の推移や内容については、むしろ誰彼の話をつなぎ合わせたものに過ぎなかったが、それにしてもすざまじい性の業火といえた。

棺に横たわる男の名は、降旗信雄、七十五歳。敗戦までの経歴は台湾にいたというだけで不明。戦後は博多駅前で屋台の天ぶら売り、それが当って渡辺通りに店を一軒構えるまでになった。その時代に女房を失い、十歳年下の未亡人と再婚したが、店が左前になるのと前後して別れた。

その後、長崎県の小佐々に移り、北松浦郡に点在する炭鉱相手の雑用品の卸しを始めた。一九七〇年（昭和四十五年）浮岳老人ホームの開設と同時に入室、間もなく賭場で働く五十八歳の津吉満江と親しくなった。

それから四年後、先宮多造があらわれるまで、二人の関係は殆ど夫婦同然のものとなっており、女の家で過ごす外泊も、半ば公然と認められていた。すべてがあまりに大びらなので、嫌がらせをされる余地がなかったのだ。

先宮多造の入室によって、事情は一変した。入籍こそしていないが、昭和三十六年より三十九年にかけて、津吉満江が彼の「再婚者」であったことは、それこそ旬日も要せず、ホーム全体に知れ渡ったのである。

ですよ。ホームの職員までがでてきて、津吉さんには早退するわけのちゃんとあったとだから、色目で見ると必要はないとか、そがんことまでいいだすもんだから、色目、色目というたりしてね。……降旗さんの気持なんて誰も考えとらんし、浮岳におる者はただ、どうしてもよかけん一日をおかしゅうくらせばそれですむ。早退けた賄さんが長崎まで行ったかどうか、それを調べるために自転車に乗ってわざわざ家まで見に行った者まであったとよ。……

ところが、津吉満江さんは家にもおらんやうなとよね。そこでもう、鬼の首でも取ったような顔して、自転車で行った者は帰ってくる。長崎、長崎ということになって、明日か明後日か、芝居見物にでも呼ばれたような気色だった。ほんとはそんな時、津吉さんは江迎の歯医者に行きなうたといふことだったとぼってん、それはもう後の祭り。……」

リヤカーに並ぶ二つ目の棺には、絞殺された津吉満江の死体が入っていた。殺害者と並ぶ死人。むしろ奇異とも思える葬列が、とにもかくにも進行するのは、浮岳老人ホームの住人だけでなく、周辺の同情を集めたせいかも知れなかった。無理心中の検死解剖さえあえて施行せぬ警察側の処置も、当然そこに荷担している。

津吉満江、六十七歳。一九三五年（昭和十年）に、唐山市出身の海軍二等兵曹と結婚。一子を生んだが間もなく死亡。良人もまた上海陸戦隊に所属して、帰らぬ人となった。

その後、福岡市の玉屋食堂部に勤め、戦争中から戦後にかけて佐賀県の工場に寮母として働いた。そして一九六一年（昭和三十六年）警官をやめて炭鉱の嘱託をしていた先宮多造と再婚したのだ。

妻を失ってちょうど十年目だという先宮多造には、すでに所帯を持ったひとり息子がおり、別府のホテルでコックをしていた。足掛け三年の同棲生活がなぜ破綻したのか。その辺のくだりも矢張り鹿取アヤによって、苗沼陽吉は知った。

「初めと後では少しずつ話の違ってきたとよね。初めのうちは、その別府でコックをしとる息子さんとの間がしっくりかんようなことをいうとって、だんだん原因はほかにあるというふうになった。息子さんはもう独立して所帯を持つとるとだし、一緒に住んでるわけでもなかつたから、折合いがわるかというても、辻褄の合わんでしょう。別府と神ノ浦じゃ距離だって大分離れとるしね。

……

先宮さんが入室してきた時、津吉さんがいちばん後悔したとはそれじゃなかったらうかと、今でもうちはそう思えるんよ。どういうていいかしらんね。どんげん辛抱しようとしても辛抱できんような晩がある。先宮さんがそういう人やった。いうてみればまあ、そがんなふうないい廻わしで、じっと考えてみるとそれも自分のことか相手がそうだったのか、曖昧になつてくるとよ。……

先宮さんが入室してきてからわかつたとはってん、とても津吉さんからきいたような顔には見えんし、ひょっとしたら、ねばりつくごと一晚中まといつかれるというのは、津吉さん自身のことじゃなかつたかと思うたりしとった。あの人は年より五つ位は若う見ええし、戦争中に佐賀の工場で寮母しとった時分は、工場の偉か人や徴用工員までちよっかいをかけてきて仕様のなかつたというとったもんね。津吉さんの口から直接きいた話よ、それは。……

縁談もひとつや二つじゃなかつたらしいけど、何かうまくいかんだったとか、ふっと口を滑らせたこともあつたとよ。佐賀市からちよつと離れた場所に、高木瀬というところがあつて、その農家に半年ばかりくらしたともいうとんなさつた。ひょっとするとそれも縁談に関係あつたのかもしれんと、うちはそう考えとった。……

うちが浮岳におつたとは、半年足らずやけど、あの人のこうした、ああしたという話はしよつちゆうでとつたとよ。……」

リヤカーの棺を、瀉と草むらの境に止めたまま、思い思いの様子で息を休めていた人々は、何処からともなく降ったように姿をあらわしたひとりの女に目を奪われた。九月の衣服としてはまるでそぐわぬ、厚ぼったいセーターまがいのものを着込んでいて、両手にはそれこそ引越してもするような細々した道具を下げている。風態から受ける印象では五十歳前後に見えるが、或はずっと若いのかも知れない。

「ああた、ああた。そがんぞろびいた恰好ばして何処に行かるっとね」

掌に一杯、草の根を握る男がいう。浮岳で漢方という渾名を持つ元美容師だ。

女は立ち止まるが、返事をしない。

「此処から先はあんまり家もなかとよ。あるとは浮岳ばかりたい」

別の誰かがいうと、そこ此処に笑いが起きた。

「蓑虫という村を知っとんなさらんね」

女の意外に張りのあるしつかりした声をきくと、人々の輪は次第に狭くなった。

「そんげん名前の村はなかとよ。蓑虫は、ありゃ影の名前じゃけんな」

「蓑虫にあんた、何しに行くとなね。その身空で勿体なかよ」

「金ヶ江さんのまた始めよらす」

金ヶ江老人との仲を、近頃噂されるようになった中松良子が声を挟む。

「蓑虫に行けばあんた、死ぬ順番を決めらるっとよ」

「死ぬ順番なら浮岳も同じたい」

「そがんこというてよかとね、あんた。折角世話して下さっとる職員さん達にすまんとばい」

かすれた笑いはふたたび皆の顔に貼付く。見えすいた世辞のわざとらしい皮肉が、もうひとつか

らつとしないのだ。

「糞虫に住んだらあんた、折角の所帶道具ばわけてやらにゃならんよ。あそこはみんな共産主義じゃけんな」

「浮岳には部屋の空いとるけん、今。ちょうどよかとばってんね」

「金ヶ江さん、何がちょうどよかとね」漢方がいう。「空いとるところにゃ、何でも埋めてやらんば。そいが人間の道やろう」

「人間の道じゃのうして、むじなの道じゃなかとね」

女はものをいわず、ただ頭だけをぐるりと廻わした。

「人間もむじなもあんまり違わんよ。持つとるものは同じだけんね」

「ああた達はそれしか興味なかごたるね」中松良子が塩辛い声をだす。「もうちょっとましな話のなかとやろか」

「真面目なおばちゃんのいわすばい」誰かがいう。「ポルノが矢張りいちばんおもしろか、というよらした人は誰やろか」

「おもしろかというたね、誰か。ポルノは見飽きてつまらんというたとよ」中松良子がいい返す。

「見飽きるまで見たというこことたい、それは。おもしろうしてつまらんけん、見たとでっしょが」首をねじまげるような動作をしながら近寄ってきた警官が「もうよかろうが、この辺で」という。

「ああたも早う行きなさい」

「出発、進行」と、漢方が声を発する。

「糞虫に行こうという者を、止めんでもよかとね、巡查さん」誰かがなおも絡む。

「仕方ななかやろう。行きたかという者を止めるわけにはいかんよ」

漢方と金ヶ江老人の引くりヤカーは動きだした。ほかの二人が押す。

「行きとうしてたまらんときは、矢張り止められんとすばいね」金ヶ江老人はいう。

「行きたか時には行かせんばあんた。萎えてしもうてからじゃ手遅れになるとばい」と、漢方。

「あんた達は、仏さんば引いとるとよ」たしなめる中松良子の声にも半ば遊びがこもっている。

「降旗さんも満江さんも魂は残つとるとだけんね」

「仏さんも行きとうして行つてしまわしたとやけん、かえつてよろこんどらすとよ」金ヶ江老人はいう。慣れ合いの過ぎたやりとりは、さすがに皆を白けさせ、しばらく声のない行進がつづいた。

右手の渦に小舟を引揚中の男が、作業を中止してこちらを見ている。三段跳びでもするような恰好で餌を突つく海鳥。苗沼陽吉は後尾について歩きながら、低く垂れ下がった雲の果てに目をやる。

事件が発生したのは三日前の遅い午後。夕食の合図で誰もが食堂へ出掛けた直後であった。殺害された津吉満江と同じ賭場で働く日比野幸恵は、地方紙のインタビューに答えている。

「いちばん忙しか時間に、津吉さんのすつとおらんごとになってしもうたですよ。食事はもう全部出来上つとりましたが、お汁を注いだり、まだせんなんことはいっぱいありましたからね。トイレにでも行ったのかと、考えとりました。何時まで経つても戻ってこないでしょう。こっちはもう苛々して……。そしたら、田代（喜夫）さんが真青な顔をして入ってこられて、賭場の床にべたつと座ってしまったとです。それからトイレの方を指でさされる。始めは降旗さんがひとりで自殺されたとばかり思うとりました。降旗さんの方が、早くみつかりましたからね。ボイラー室の裏手で津吉さんが殺されとることは、その時はまだ気付いていなかったんです」殺害現場は周辺の目からちょうど死角に入るボイラー室の傍。津吉満江を二重の細い布紐で絞殺した後、降旗信雄は剃刀